吾妻山殉難の記録

気象庁のホームページには、最新の火山情報の提供があり、“現在の火山活動レベル”というデータが出てくる。現時点で吾妻山は、東北で唯一掲載されており、レベル１（静穏な火山活動）と表示される。

吾妻山とは、福島県の北部から山形県との県境にまたがる一大火山地の総称であり、「吾妻火山群」、「吾妻連峰」と同義である。この２枚の絵図の場所である“一切経山（いっさいきょうざん）”は、吾妻小富士や家形山などと東吾妻火山群を形成し、その円頂には1948.8mの１等三角点がある。山々の間には、五色沼や鎌沼などの火口湖が神秘の光をたたえ、1950（昭和25）年磐梯朝日国立公園に指定された。また、1959（昭和34）年山岳自動車道磐梯吾妻スカイラインが開通している。

さて、これら２枚の絵図であるが、1893（明治26）年の一切経山噴火の記録を留めたものである。吾妻火山は、18世紀初頭や19世紀初頭に小規模な噴火をおこしていたといわれるが、記録には残っていない。正確な記録が残っているのは、この1893（明治26）年の噴火以降である。同年5月19日に一切経山の南側中腹・燕沢（つばくろざわ）付近で突然爆発が起こり、土石を噴出、噴煙は約2,000メートルの高さに上がり泥雨を降らせた。その後も断続的に爆発し、太平洋沿岸まで降灰があったという。

『吾妻山噴火（明治二六年五月）実況見取図』と付箋がついている方は、明治二六年五月とあることから、この5月19日の噴火を受け、農商務省が地質調査所の三浦宗次郎技師ら一行を派遣した際の、第1回調査資料の一部ではないかと推測する。

また、『吾妻山噴火際調査ノ為登山セシ三浦技手遭難ノ図』は、6月4日の再噴火の連絡を受け、再び現地に入った調査団一行が、捜索隊に発見された時の様子を模写したものである。火口付近を調査中に噴石にあたり殉職した、三浦宗次郎技師と西山惣吉技手の遺体発見現場の状況と、降石に打裂された身体状況が細かく書き込みされている。

当時の『福島民報』の新聞記事や当館所蔵の吾妻山関連資料などから、6月9日付け福島県知事日下義雄に宛てた福島警察署長桐原彦吉の報告書の一部ではないかと思われる。報告書（第三報）によると、「・・不幸にして災害を被むりしときは互いに救助すべきことを云々訓示し・・」、「此處は両人の負傷せし處にして尤も危険なる旧噴坑を・・・四五分時毎に噴烟して小石を飛ばす危険の場所にして・・」、「泥濘に陥りたるを共に救い揚げ或いは死体を背負杯辛ふじて・・泥深くして腰を没し容易に移し難く・・七名の巡査をして泥中に人橋を作らしめ死体を川向へに推移運搬の状其艱苦実に名状す可らす而して・・・」などの文言が並び、巡査8名と医師1名による捜索は困難を極めたことが推し量られる。

この噴火による降灰は、信夫・伊達・安達・田村・岩瀬・石川・耶麻の各郡、宮城の亘理、山形の置賜の二郡にまで及び、新聞には蚕糸業組合が「緊急廣告」なるものを度々掲載し、蚕児が桑葉に付着した噴灰によって中毒死する可能性があることを警告している。当時の福島県が、信達地方を中心として、いかに養蚕が盛んであったかを知ることができる。

前後して1888（明治21）年には、磐梯山が大噴火し、死者477人もの犠牲者がでた。1900（明治33）年には、安達太良山の沼ノ平付近が爆発し、死者72人という大惨事となっている。犠牲者の数だけから見れば、吾妻山噴火は被害が少なかったということになるのかもしれないが、正確な記録が残っている日本の火山観測史上初の殉死ということで、歴史に刻み込まれた。殉難の二碑は1921（大正10）年吾妻山浄土平の西、登山道沿いに建立され、当時の状況を偲ばせる。また、福島市内信夫山公園にも1899（明治32）年に建立された吾妻山殉難記念碑がある。

菅野　由美（福島県立図書館主任司書）

【参考文献】「吾妻山回想譜」二階堂匡一朗著
「微温湯案内記」引地清治著
「吾妻山」木村完三著

L453.8
A

吾妻山噴火（明治廿六年五月）実況見取図

本館蔵

552
0021
74

吾妻山噴火（明治廿六年五月）実況見取り図（福島県立図書館蔵）

吾妻山噴火ノ際、調査ノ為登山セシ、三浦技手遭難ノ図
（福島県立図書館蔵）

福島市北部より望む吾妻連峰（菅野由美撮影）